

機関番号：32610

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19529004

研究課題名(和文)

〈結果志向〉〈過程志向〉を再考する—言語・認知・文化的構築物の相同性を求めて—

研究課題名(英文)

Rethinking "result-orientation" of English and "process-orientation" of Japanese :
Homology of Language, Cognition, and Cultural Construction

研究代表者

八木橋 宏勇 (YAGIHASHI HIROTOSHI)

杏林大学・外国語学部・講師

研究者番号：4053526

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「英語は結果を重視」し「日本語は過程を重視」という傾向を再検証することであった。言語構造の様々なレベル(語・句・文・談話)および言語以外の文化的構築物の具体的な事例を考察し、主に語彙レベルで論じられることが多かった英語と日本語の「結果志向」「過程志向」をより包括的に検証した。いずれのレベルにおいても、従来の見解を支持する結果となったが、語彙レベルにおいては、「結果」「過程」の解釈に揺れが見られる事例も散見され、メトニミ的解釈に説明を求めることが妥当であるとの結論に至った。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to rethink the tendency toward "result-orientation" of English and "process-orientation" of Japanese. We comprehensively examined the orientedness, which has often been discussed mainly on the lexical level, based on detailed analyses of cultural constructions besides language and on various language phenomena such as lexical, phrase, sentence, and discourse levels. The research results support the traditional views of all the levels. However, on the lexical level, we encountered several examples that had ambiguous interpretations and concluded that it is plausible that whether or not a lexical item can be interpreted as a "result" is explained in terms of metonymy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	0	1,100,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,900,000	840,000	4,740,000

研究分野：認知言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：①結果志向 ②過程志向 ③認知 ④文化的構築物 ⑤相同性 ⑥事態把握

1. 研究開始当初の背景

従来、言語と思考の関係を論じる場合、「ある思考が存在するのはこのような言語

表現が存在するからである」「ある言語表現が存在するのはこのような思考が存在するからである」という両者を行ったり来たり

する循環論法に陥ることが多く、その全体像を的確に捉えることは難しかった。しかし、認知言語学による個別研究の積み重ねと、理論の深化・精緻化によって、言語も思考もそして各文化的特徴も認知的営みの産物であるということが明らかとなった。それにより、言語・思考・言語以外の文化的構築物（例えば「絵画」「庭園」「家屋」「法制度」「スポーツ」など）を相同性の観点から丹念に検証することで、より実証性の高い研究を推進することが可能となった。

2. 研究の目的

本研究は、これまで指摘されてきている「英語は結果を重視」し「日本語は過程を重視」するという傾向を、言語構造の様々なレベルで再考察し、英語と日本語の言語構造の背後にある思考体系を明らかにすることを目的とした。特に、「結果志向」と「過程志向」という思考パターンを、言語構造および言語以外の文化的構築物の双方から検証することで、各言語話者の概念レベルにおける事態の把握の仕方を探り、主に語彙レベルで論じられることが多かった英語と日本語の「結果志向」「過程志向」をより包括的に捉える試みであった。

以上の目的を達成するため、本研究は、語、句、文、談話というレベルごとの考察によって構成され、それらに対する総論としての全体議論を展開することにより、各レベル間の相同性、言語体系全体としての一貫性の有無、言語以外の文化的構築物との相同性について検証し、これまでの研究をさらに深めることを目指してきた。

3. 研究の方法

本研究は、以下の方法論的な特徴を持っている。

- (1) 従来の「形態論」「統語論」「意味論」という縦割りの研究区分を解体し、「語レベル」「句レベル」「文レベル」「談話レベル」という基準を設定。
- (2) 人間の認知的な営みが発現した現象として言語を捉え、同じく認知的な営みによって創造されていると考えられる言語以外の文化的構築物との相同性を検証することにより、英語話者と日本語話者の概念レベルにおける事態の把握の仕方を包括的に検証。

4. 研究成果

(1) 語レベル

文献調査、インフォーマント調査により、英語の動詞は行為の目的が達成されたことまで含意する傾向にあること、日本語の動詞は行為の目的が達成されるころまでは含意しない傾向にあることが確認された。ただし、文脈や構文的環境によっては、それぞれの言語の志向性とは相反する読みが可能となっている例もあった。これは、語の意味は（従来の代表的な説明である）「意味構造」という客観的な既定的要因によって一義的に決められるものでは必ずしもないことを意味していると思われる。発話文脈における（百科事典的知識等の）非言語的な手がかりを参照しながら、言語表現の背後の意味を主観的にくみ取っていくダイナミックな認知プロセスに着目し、とりわけ参照点構造に基づくメトニミの観点から説明されることが妥当であると結論付けた。

(2) 句レベル

文献調査、インフォーマント調査により、英語の V+NP 型イディオム (e.g. *spill the beans*) と日本語の NP+V 型イディオム

(e.g. 舵を切る) のアスペクトを調査した。句レベルのイディオム表現において、結果含意の読みが可能となる例は相対的に英語の方が多く、日本語では行為の結果をキャンセルできる例が英語よりも多く観察された。

また、各言語の志向性を示唆する構文も考察した。例えば、行為の結果を含意すると考えられる日本語の動詞であっても、「X テモ X テモ Y ナイ」構文と共起する場合には、行為の過程が前景化し、行為の結果は背景化されることが明らかとなった。語義のプロトタイプとして結果を含意する動詞であっても、過程の解釈を前景化させる構文が文法的に日本語には備わっているということは、過程志向という日本語の特徴を証左しているものと思われる。

(3) 文レベル

文レベルにおける英語の「結果志向」および日本語の「過程志向」について、英語の完了構文と日本語の「…テイル」の比較を通じて検証した。両構文はともに結果状態をあらわすものとされているが、Vendler (1967) による動詞の4分類と構文との共起関係に注目して考察すると、達成動詞と到達動詞において英語と日本語の間に意味の非対称性があることが分かり、前者が結果をあらわす構文であるのに対し、後者は継続をあらわす構文であるということを確認した。

また、結果の概念が英語の完了構文および日本語の「…テイル」にどのように構文化されているか考察し、両言語話者の事態把握を比較した。「…テイル」は<いま、ここ>に基づく概念である存在をあらわす動詞を含み、結果状態を話者が眼前で確認している表現で、主観性が高い。一方、完

了構文は、事態を結果状態を含む1つのまとまりとして捉え、客観的である。また、「…テアル」は「…テイル」であらわされる動作進行の用法を持たず、主観的表現であることの現われであることを実証した。

さらに、使役移動構文、二重目的語構文をもとに、結果概念の英語での重要性を確認した。英語話者は出来事を全体的に捉え、視座に終点(結果状態)を含む点において、その把握は有界的であり、日本語話者は出来事の内部に焦点を置き、終点を焦点に含まない点で、無界的把握を行う傾向にあることを実証した。移動構文においては、移動の概念が英語では付随要素に包入されて非時間的に捉えられ、日本語では動詞に包入されて時間的に捉えられており、有界的把握・無界的把握への更なる裏づけをしていると結論付けた。

(4) 談話レベル

メディア報道では客観的な事実が報道されていると考えられがちであるが、実際には文化的な価値観により情報が取捨選択されている。そのため、新聞記事というテキストの中で何が重要とされるのか、またどのような言語的手段によって表現されているのか、といった相違が言語間で観察された。スポーツ記事の見出しに関して言うと、英語ではヘッドラインで結果(因果関係)が明記される傾向が強い一方で、日本語では試合の結果ではなく、試合の中で起こったことのみが表されており、日本語の出来事それ自体に注目する特徴が観察された。リード・パラグラフにおいては、英語では試合結果を要約した内容が書かれる一方、日本語では試合中のある状況設定から記事が始まることが多く、その後には特定の出来事を描写したり、選手の精神面が詳述さ

れる傾向にあった。このように、英語と日本語では同じ出来事を述べる際にも、Bally (1920) の言う「因果志向的」な言語と「現象志向的」な言語の特徴が現れていることが観察された。また、英語の新聞報道では無生物主語が客観的な事実を述べるために使用される傾向が強いが、日本語では当事者の内面を描写するために使用される傾向が強いことも確認した。

文学作品を題材にした考察では、夏目漱石の『坊っちゃん』とその英訳版を比較し、実際の言語使用において、英語の結果志向と日本語の過程志向という特徴がどのように現れているかを検討した。英語では一貫して過去時制が使用されており、英語話者が視点を発話時点に置き、事態を完了したものとして捉えているのに対し、日本語では過去時制と現在時制が混在し、日本語話者は過去時制によって事態と同じ時点に視点を置き、現在時制によって事態をあたかも目撃しているかのように捉えていることを明らかにした。

(5) 言語以外の文化的構築物レベル

言語以外の文化的構築物においても同様の傾向が観察された。例えば、「若返り」という趣旨を共有している『飛ぶ夢をしばらく見ない』(1990年)と『ベンジャミン・バトン 数奇な人生』(*The Curious Case of Benjamin Button*, 2008年)を比較した。前者は主人公の入院の場面から始まり、最後には雑踏の中に消えて行くという終わり方をしており、非有界的で未完結な物語構造となっているが、後者は主人公が生まれた場面から死を迎える場面までを有界的に描いており、結末に向かってストーリーが収斂されていく展開をとっているため完結的な物語構造となっていた。

また、「明快さの方略」が優先されているアメリカのTVコマーシャルと、「調和の方略」の発現として特徴づけられる日本のTVコマーシャルの実例を検証した。前者は、広告対象自体に焦点を当て、デモンストレーションを交えながら論理的かつ説得的に展開されている例が多く、提供される即物的かつ十分な情報(量・質の公準に相当)が、論理的に理解できる適切な形(関連性・様態の公準に相当)で提供されており、視聴者は広告対象が自らにとって必要なものか不要なものかをコマーシャル内の情報だけで十分に判断できるようにできていた。「視聴者を消費行動に促す」という目的に向かって一コマコマが収斂されていく、いわば結果志向的で完結性のある有界的な構造をしていた(目的を達成するための「話し手責任」=結果志向)。一方で、日本のTVコマーシャルは、視聴者を消費行動へと導く手法がアメリカのコマーシャルとは異なり、広告の最終目標(視聴者の消費行動を促すこと)を背景化して視聴者に商品のイメージや雰囲気を経験してもらう創りになっているものが多く、過程志向的であり、15秒という時間枠の中で(広告の目的である)消費説得行動が完結するような構造にはなっていない。すなわち、視聴者を消費行動に導くディスコースのスコープは、(アメリカのコマーシャルに比べ)コマーシャル内で十分には完結されておらず、それに後続する消費者側の解釈まで含める形で成立しており、結果として日本のTVコマーシャル自体の構造は、「視聴者の心象」に向けて開放されているという意味で無界的だと考えられる(消費行動に導くという意図を背景化し、消費行動につながる視聴者の感じ方を重視する「聞き手責任」=過程志向)。

[雑誌論文] (計 14 件)

- ① 多々良直弘、谷みゆき、八木橋宏勇、英語と日本語に現れる言語と文化の相同性、『言語文化研究』(桜美林論考)、査読有、第 3 号、2012 年、61-80
- ② 八木橋宏勇、比較広告の日米比較：説得のディスコースと好まれる伝達方略、『杏林大学研究報告(教養部門)』、査読無、第 29 号、2012 年、137-146
- ③ 八木橋宏勇、日本語の結果含意動詞と「X ても X ても Y ない」構文、『杏林大学研究報告(教養部門)』、査読無、第 28 号、2011 年、127-134
- ④ 八木橋宏勇、「X ても X ても Y ない」構文の意味分析—アスペクト転換機能と日本語の過程志向—、『杏林大学外国語学部紀要』、査読有、第 23 号、2011 年、171-182
- ⑤ 谷みゆき、文学作品とその英訳に見る英語の<結果志向>と日本語の<過程志向>、『立教大学ランゲージセンター紀要』、査読有、第 24 号、2010 年、51-60
- ⑥ 八木橋宏勇、文化・コミュニケーションレベルに見る<有界性>と<無界性>—日米広告メディアの比較、『英文学研究』、査読有、支部統合号 2、2009 年、417-420
- ⑦ 多々良直弘、談話レベルに見る<有界性>と<無界性>—物語と新聞報道にみる英語と日本語の特徴、『英文学研究』、査読有、支部統合号 2、2009 年、415-417
- ⑧ 谷みゆき、文レベルに見る<有界性>と<無界性>—構文における相同性、『英文学研究』、査読有、支部統合号 2、2009 年、413-415
- ⑨ 多々良直弘、新聞報道における英語と日本語のテキスト構造の比較、*JELS*、査読有、26、2009 年、309-318
- ⑩ YAGIHASHI HIROTOSHI、Why Can a Japanese Unagi-Sentence Be Used in a

Request?, *Lodz Papers in Pragmatics*、査読有、5-2、2009 年、227-240

- ⑪ 八木橋宏勇、スキーマとしての概念メタファとイディオム、『杏林大学外国語学部紀要』、査読有、第 21 号、2009 年、271-289
- ⑫ 多々良直弘、物語としての新聞報道の日英比較、『桜美林英語英米文学研究』、査読有、第 47 巻、2008 年、105-117
- ⑬ YAGIHASHI HIROTOSHI、Aspects of Idioms—New Developments in Cognitive Linguistics From 1987 to the Present、『杏林大学外国語学部紀要』、査読有、第 20 号、2008 年、145-164
- ⑭ 八木橋宏勇、<近い>とはどういうことなのか—因果の認知とメトニミー、『杏林大学研究報告(教養部門)』、査読無、第 25 号、2008 年、95-104

[学会発表] (計 9 件)

- ① 多々良直弘、出原健一、八木橋宏勇、野村佑子、視点研究の深化を目指して：日英対照研究を再考する、社会言語科学会第 29 回研究大会ワークショップ、2012 年 3 月 10 日、桜美林大学町田キャンパス
- ② TATARA NAOHIRO、The Motivations for the Usage of Inanimate Subject Constructions in English and Japanese Discourse、International Pragmatics Association 12th International Conference、2011 年 7 月 7 日、マンチェスター
- ③ TANI MIYUKI、INOUE IPPEI、TATARA NAOHIRO、YAGIHASHI HIROTOSHI、*Is English result-oriented and Japanese process-oriented?: Empirical analyses of “fashions of speaking”*、International Pragmatics Association 11th

International Conference、2009年7月13日、メルボルン

④八木橋宏勇、井上逸兵、谷みゆき、多々良直弘、コミュニケーションと認知言語学—認知と言語の有契性を考える—、日本英文学会関東支部研究大会シンポジウム、2008年9月21日、早稲田大学戸山キャンパス

⑤花崎美紀、花崎一夫、多々良直弘、谷みゆき、八木橋宏勇、日英語における相同性を考える：＜有界性＞と＜無界性＞、日本英文学会中部支部研究大会シンポジウム、2008年10月18日、信州大学旭キャンパス

⑥多々良直弘、新聞報道における英語と日本語のテキスト構造の比較、日本英語学会第26回大会、2008年11月16日、筑波大学筑波キャンパス

⑦谷みゆき、出原健一、多々良直弘、八木橋宏勇、英語と日本語の好まれる事態把握—＜結果志向＞と＜過程志向＞の動機づけ—、日本言語学会第137回大会ワークショップ、2008年11月29日、金沢大学角間キャンパス

⑧多々良直弘、谷みゆき、八木橋宏勇、＜結果志向＞と＜過程志向＞—言語構造に見る相同性、「言語と人間」研究会5月例会、2007年5月12日、立教大学池袋キャンパス

⑨多々良直弘、花崎美紀、花崎一夫、谷みゆき、八木橋宏勇、英語と日本語の＜結果志向＞＜過程志向＞を再考する、日本英語学会第25回大会ワークショップ、2007年11月10日、名古屋大学東山キャンパス

〔図書〕（計1件）

①唐須教光、井上逸兵、多々良直弘、谷みゆき、八木橋宏勇、他、慶應義塾大学出版

会、開放系言語学への招待、2008年、241ページ

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

八木橋宏勇 (YAGIHASHI HIROTOSHI)

杏林大学・外国語学部・講師

研究者番号：40453526

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

井上逸兵 (INOUE IPPEI)

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：70213147

多々良直弘 (TATARA NAOHIRO)

桜美林大学・リベラルアーツ学群・講師

研究者番号：80383529

谷みゆき (TANI MIYUKI)

中央大学・法学部・准教授

研究者番号：50440201